

アイヌ語で自然と出会おう... 身近な存在としての自然

多くの生き物にアイヌ語名がついていて、人とのかわりが深いものには、とくにくわしくついています。

植物でいえば、食べものとなるギョウジャニンニクは「ブクサ」、オオウバユリは「トゥレフ」、また狩りの時、矢の先にその強い毒をぬったトリカブトは「スルク」といいます。

動物では、食べものや毛皮をくれるエゾシカは「ユク」、キタキツネは「チロンノフ」(私たちがたくさん殺すもの)といい、大きくて強いヒグマは「キムンカムイ」(山の神)と呼ばれていました。

川の魚では、サケのことは「カムイチェフ」、つまり「神の魚」といい、これも大切な食べものであるイトウは「チライ」といっていました。(魚の名 p119)

フクジュソウは、十勝では「チライムン」といいますが、これは「イトウの草」という意味です。春先、フクジュソウが花を開くとイトウが川をさかのぼってくるので、漁を始める合図としていたのです。

上士幌町の「東泉園(p120・p129・p131)」では、上士幌ウタリ文化伝承保存会の人たちが、十勝のアイヌ民族が利用してきた植物を育て「アイヌ植物園」をつくっています。

大雨による土砂くずれにあうなど、多くの苦勞をしながらつくり続けられている、とても貴重な場所です。



「トウレフ」オオウバユリ。



「チロンノフ」キタキツネ。



「チライ」イトウ。
(飼育: 幕別町ふるさと館: 5)



「チライムン」フクジュソウ。



「アイヌ語で自然かんさつ」。帯広ひゃくねんきねんかん百年記念館(6)による観覧会。
(十勝千年の森・清水町羽帯)



「東泉園」(上士幌町)の「アイヌ植物園」。

注: この本では基本的に十勝地方のアイヌ語名を紹介しています(他のページでも)

目で見る自然の大変化... 植生図でくらべる十勝

右の2つの図は、どんな植物が生えているかで色分けをした「植生図」です。

左側は、もし人が自然を変えなかったらどうだったか、という図で、右側は今のようすです。

小さくしているので細かい分け方はわかりませんが、それでも、今の図では、オレンジ色が目立つことがわかります。ここは、畑になったところす。

また、緑色の部分も、よく見れば色が変わっています。さらに、同じ色のままでも、木の太さや生え方が大きく変わっていることがあります。



潜在自然植生図。もし、人が手を加えなかったら、という植生図。



現存植生図。今のようすはどうか、という植生図。

「北海道現存植生図(日本植生誌 北海道)」宮脇昭・奥田重俊、国土地図、至文堂、1988

「北海道潜在自然植生図(日本植生誌 北海道)」宮脇昭・藤原一絵・中村幸人・大野啓一・村上雄秀・鈴木伸一、国土地図、至文堂、1988

館)=十勝のアイヌ語名をのせている。「アイヌ植物誌(福岡イト子)」=十勝の名前とは異なることもあるが、利用法、伝説、著者の体験など、とても興味深い内容。
5 幕別町ふるさと館(まくべつちょうふるさとかん): 幕別町依田384-3(依田公園横)

電話 0155-56-3117 月・火曜日休館
6 帯広百年記念館(おびひろひゃくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155-24-5352 月曜日休館